

三脚物語 第一回

汀

鷗

一

僕——僕といふのが一番適當な代名詞だらう、吾輩といつては猫のやうだし、拙者、身共、某と来ては大時代、ヤツガレは馬琴を思ひ出すが少く下卑^{げび}テる、俺^{をれ}なんといつては讀者諸君に失敬だ、小生は何だか手紙に書きそつた、自分といふのも可笑しい、拙^つばキザだれ、下拙と來ちやア鼻持がならない、手前は町人臭い、此方^{このほう}乃公などは横柄だ、私なんていふガラじやアない、ワツチは意氣だが少し安つばいれ、矢ッぱり僕がいゝ、僕に限る。前置が長くなつたが、この僕といふのは、諸君の尻に敷かれていつも忠實に御用を勤める三脚のとき、忠實にと今しがた言つたがれ、乗つてる野郎が生意氣だと、時々謀反を起して一本ボキンとやらかして、ヤッ！といはせることもあるさ、勿論コツチも少々痛い目にするが、手に持つテた繪具箱を抛り出しの、大地に尻餅を搗いて、顔を擧めて腰をさすりく、起き上る體裁が一寸見物^{みもの}で、これが見たいばかりに時々ワルサをする仲間も居るよ。

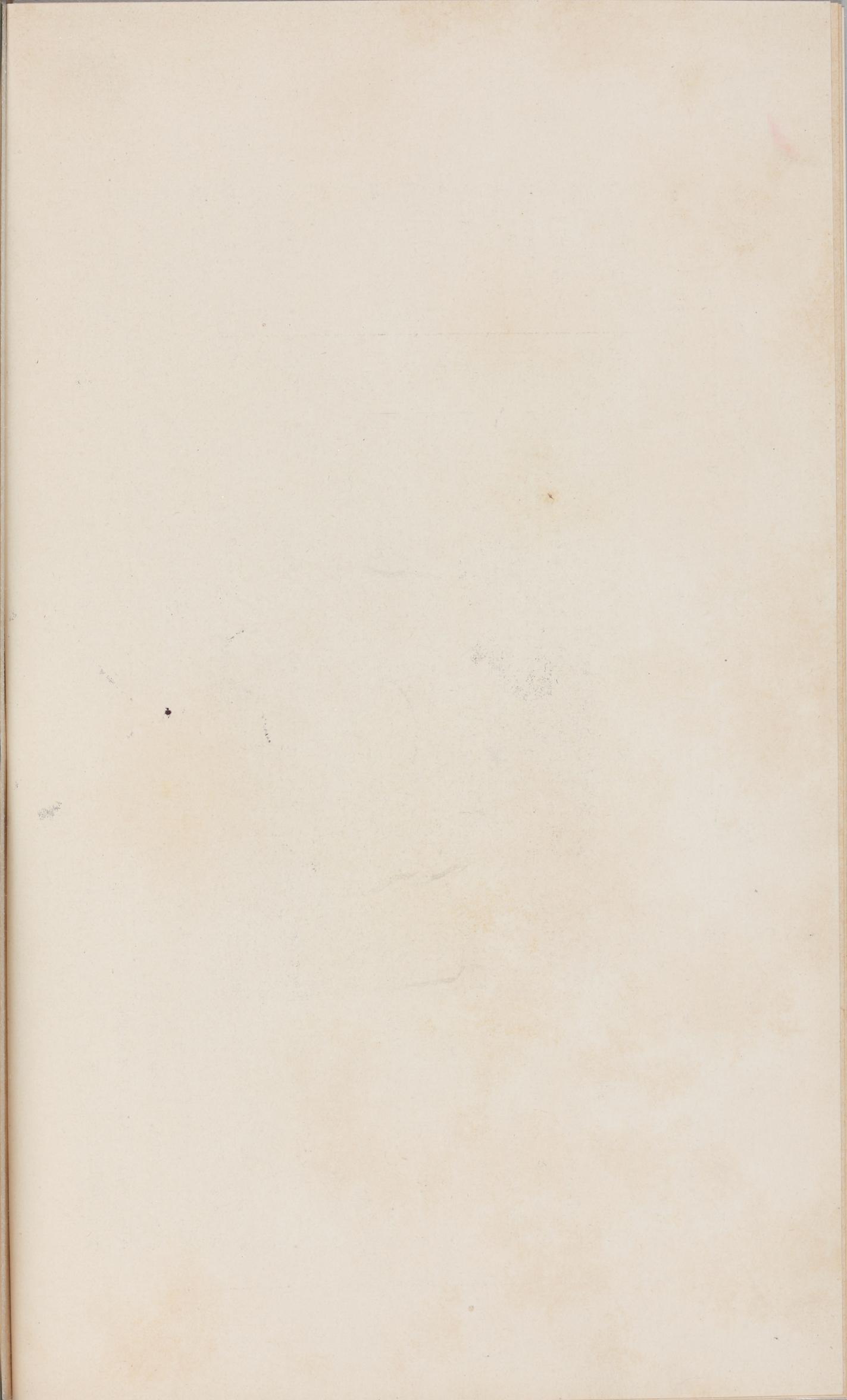
忘れもしない去年の八月だ、鎌倉で講習會のあつた時、僕が宿屋の二階の床の間で少し考へ事をしてゐると、傍へ二三人の袴を穿いた連中がやつて來て、頻りとヒネクリ廻し、ヤレよく手磨れてゐるの、革が破れてゐるの、眞黒だのと好きな事を言つ

てたが、仕舞にこの三脚は随分長い間先生にクツツイてゐたらうから、白狀さしたら面白い話が澤山あるだらうと一人が言ふと、他の一人も、これが口をきくものなら饒舌^{しゃべ}らして見たいといつた、僕はその時思つたれ、こゝろ見えても、今の主人がそも／＼繪の習ひたてから奉公をしてゐるんで。最初の景色寫生に腰を据えられてから今日迄離れたことがないんだ、だから、お話をすりやア切りがない、僕等の仲間の日傘や繪具箱や畫架なんかには、互に多年の懇意上思ふことが通じ合ふが、人間には分らない、そこで、古い馴染のブラツシ君に頼んで、僕にザツトした經歷を書しるして、そのうへ種々の見聞を思ひ出し次第に並べて見やう。

二

僕のお姿は、いづれ寫眞版にでもして貰つて諸君にお目にかけるが、まづ脚は頑丈な檜の木で、少しの重味で直きへシ折れるやうなそんな弱いじやアない、革は厚味の二分もあらうといふ丈夫な白ナメシ、尤も一方の縁が二寸ばかり削りとられてゐるが、これは軍艦に乗つて濠洲へ往つた時、平生は不用だといつて、倉庫の棚の上に上げられてゐたが、船の中の鼠め、喰物が乏しいもんだから、シマイには僕の處へやつて來て、厭だといふのに構はずポリ／＼嚙り出したのさ、オヤ／＼大變、コイツは全身喰はれるかと大に心配したが、そのうち倉庫に米が運ばれたので僕の難は脱れた、傷はその時の紀念さ。三脚の締め括りの鐵物^{かなもの}と來たら、憚りながら堅鐵で、この頃出來るやうな、ヒカ





く光つてばかりゐて、少し捻ると折れたり、ネジが飛んだりするやうな。ヤクザのじやアない、今の主人の處へ來てから、脚一本折れたこともなければ、ネジ一つ飛ばしたことはない。一たい、寫生箱でも傘杖でも、ピカ／＼が大流行だが、アンナお姫様の玩弄物のやうなものを持つて喜んでゐる人達の氣が知れない、今度出來たといふ革止の奴はハイカラだが、ピカ／＼よりはましだらう。

僕もだいぶ長い御奉公で、全身は自然に手褶れて底光りかしてゐる、ネシの頭なんか磨かれたやうに眞白に光つてゐる、革も糸がほつれて針鐵で繕はれてる、これは何も僕が弱いセイじやない、年をとればこの位のことば詮方があるまい。

三

僕が職人の手を離れて、京橋の伊藤といふ彩料舗に轉かつてゐたのは久しい間だじやアなかつた。色が黒いので、カツパアブラオンとよばれてゐたあんまり正直でもない伊藤の番頭に連れ



られて、今の主人の手に渡つたのは、思へば十七八年昔しの事だ。それからといふものは、旅行は勿論、近所の寫生、散歩に迄もお供をしてゐるが、主人も僕を非常に可愛がつて呉れて、歩行時は腰にきげたり、または日傘と一しよにして手に持

久保 澤 藤 島 英 輔 筆

つたり、瀟車では網棚へ乗せてくれる、時には席に立てかけて戸外も見せてくれる、宿屋へ泊れば、キツト上段の床の間に置かれる、それは／＼大切にして呉れる、難有ことだが、又考へて見れば、僕が居ないと大困りだからそのセイもあるかも知れない。併しこつちも困ることがあるさ、荷持人足無しの旅と來ると、畫板やら書物やらを革紐で括つて、僕を天秤代りに紐に

通して肩で擔ぐ、五丁や十丁は辛抱もするが、これが二里となり三里となると随分コタへるね。それから、汽車の網棚でも時にヒドイ目に逢ふ、ニコト／＼進行に連れて、よい心特ぢでうつとりしてゐると、下から急に白い烟がモク／＼と上つ來る、烟くつて／＼咽喉はイガラクなる、涙は出る、耐つたものじやな

い。ドーも煙草をのむ人は僕は嫌ひだ、臭くつていけない、しかし畫家で煙草をのむ人は澤山ある、西洋の畫家の傳記にも、よく労働者の持つ頭の大きい木の煙管へ、キザミ貰を詰めてスツバ／＼やつてゐる先生があるらしい、日本の洋畫家にも澤山ある、岡先生もやる、丸山河合兩先生は盛んなもんだ、永埜先生は時としての組だ。石井先生中村先生はやらない方だつたと思ふ、満谷先生はたしか不得意だ、白馬會の方へはメツタに往つた事がないからよく知らないが、三宅先生は禁煙黨だ、僕も主人も喫まない、前年大阪で講習のあつた時、講師の大橋先生も僕の主人も煙草をやらす、その上、煙草の烟りが色彩を變らせるから、繪には害があるといふ話をしたので、會員の一人は爾來禁煙をするといつてゐたが、近頃はドウだか、この人は面白い人だつた。

四

習慣だから醜くないやうなもの、煙草をのむのは菓子を喰ふのと同様だ、イヂキタナシだ、歩行いてゐてもやる、客の前でも平氣でやる、寢床でもやる、便所でもやる、甚しいのは風呂の中で吸つてゐるのがある、コーなるとあまり感心は出来ない。主人の親友の某氏は、先年アメリカへ往つて、寢臺瀛車へ乗つたが、そこでは煙草をのむことが出来ない、苦しまぎれに寢床へ入つてから内しよで吸つて、その煙を空氣枕の中へ吹き込んだとの事だ、こんなにしてものみたいものかしら、よほどよい味のものに見える。

寫生して勞れた時に一寸一服やるのは實にいい氣持のものだ。うだ、その間に妙想も浮ぶといふ。それから煙草の煙でブトや蚊は追拂ふことが出来るといふ。よほど前の事だ、主人の供をして植物園へ往き、あの竹藪の中へ据へられた、藪のことだから盛んに蚊が責かける、主人は苦しがつてドコへか出掛けたと思つたら、やがて巻煙草を買つて來た、そして十本の煙草に一々火をつけて僕の廻りへ立て、置いた、此時は僕大に閉口したよ、そのうち直ぐ火の消えるのもある、半分位ひ燃えるのもある、燃え切つて仕舞つたのは一つもなかつた、蚊よけの効能もあまり成功しなかつた様だつた。

煙草の効能はまだある、靴ずれの出來た時、吹殻を飯で練つて局部へつけて置くと翌日は治つてゐる。煙草腹も一時で空腹の兎にもなる、煙草黨に言はせればまだ、澤山能書はあらうが何が何でも僕は煙草は嫌ひだ、主人も生意氣盛りには喫つたこともあるそうだ、紙巻はキナ臭い、葉巻は強くつて目が廻る、刻みは煙管のヤニの臭いのが嫌ひだ、外出の時用意した煙草はのむのを忘れてゐる、喫うと思ふ時は袂にないといふやうな譯で、そんなにして迄も勉強しなくもよいといふのでとう／＼止めてしまつたさうだ。アメリカ人は、無やみ矢鱈に何處へでも唾を吐くといふ、これは煙草をのむからだとは、この頃の新聞にあつた、煙草といふ奴は穢らしいこと迄させる厄介な奴だ。